

【市民公開講座／特別上級講義】流転する世界で『真なる存在』を掴み取る—— プラトンとアリストテレスの存在論バトル

はじめに：ようこそ、深淵なる古代ギリシャ哲学の世界へ

皆さん、こんにちは。本日は「市民公開講座」ということで、予備知識ゼロの一般の皆さんをお迎えしているわけですが、お隣や後ろの席を見てください。なんだか目の下にクマを作り、分厚い原書を抱えて虚空を睨みつけている若者たちがいますね。はい、彼らは我が研究室の博士課程の院生諸君です。彼らには「市民のフリをして一番前で大人しく聴いておくように」と言い含めてあります。ですから今日の講義は、「知識ゼロの市民が1時間後には博士課程レベルの深層に到達する」という、極めて野心的で超高難易度な講義になります。覚悟はよろしいですか？ 肩の力を抜いて、しかし脳細胞はフル稼働させてついてきてください。

さて、本日私たちが解き明かすのは、人類の思考史における最大の対決、プラトン vs アリストテレスです。

お配りした資料の画像にある、アリストテレスの『形而上学』M（ミュー）巻第4章の極上のテキストを肴に、「本質（存在）」とは一体どこにあるのかという、気が遠くなるような謎について考えていきましょう。

第1章：すべての始まりは「流れる川」と「ソクラテスの問い」

まず、アリストテレスのこの一節の冒頭を見てみましょう。

「ところで、この実相（エイダス）の説がその主唱者たちに生じたのは、彼らが真理に関して、『すべての感覚されるものは絶えず流転している』というヘラクレイトスの言葉に従ったからである。」

ここにヘラクレイトスという、これまた偏屈で面白い哲学者が登場します。彼は紀元前5世紀頃の人ですが、「万物は流転する（パンタ・レイ）」という有名な言葉を残しました。「同じ川に二度入ることはできない」という例え話が有名ですね。川の水は常に流れている。あなたが足を浸したその瞬間と、次の瞬間では、そこにある水は別のものであり、川そのものも変化している。

脱線：私の行きつけのラーメン屋の話

ここで少し脱線しましょう。私には大学の裏手に、かれこれ30年通っているお気に入りのラーメン屋があります。ここの醤油ラーメンが絶品なのですが、実は行くたびに味が微妙に違うんです。ある日はスープが少し塩辛く、ある日はチャーシューがいつもより分厚い。店主のおやじさんも歳を取り、スープを混ぜる手つきも昔とは変わってきました。

哲学的に言えば、このラーメン屋のスープもまた「絶えず流転している感覚されるもの」です。

しかし、不思議だと思いませんか？味が毎回違う（流転している）にもかかわらず、私はそれを「あの店のいつものラーメン」と認識し、皆さんもそれを「ラーメン」という一つの言葉で呼び、理解し合っている。

流転し、変化し続けるこの世界の中で、なぜ私たちは「これはラーメンだ」「これは机だ」「これは正義だ」と、変わらない何かを認識できるのでしょうか？

ソクラテスの執念：普遍的な定義の誕生

そこで登場するのが、プラトンの師匠であるソクラテスです。

ソクラテスは、アテナイの街を歩き回っては、「正義とは何か？」「美とは何か？」と人々に問い詰めました。当時の人々は「国家を愛することです」とか「美しい女性のことです」と個別の具体例（感覚されるもの）を答えましたが、ソクラテスは満足しませんでした。

「いや、私が聞いているのは『正義の具体例』ではない。それらの具体例を『正義』たらしめている、すべてに共通する普遍的な定義は何か、ということだ」

アリストテレスはこう書いています。

「しかしソクラテスは、そのような普遍的なものあるいは諸定義が、独立したものだとは言わなかった。」

ソクラテスは、日常の会話や具体的な物事の中に、共通する「定義」を探そうとしました。彼はあくまで、私たちの現実の生の中で「よく生きる」ために、その定義を求めたのです。

第2章：プラトンのジャンプ——「イデア」を天上に隠した男

しかし、ソクラテスの愛弟子であったプラトンは、ここで壮大な思考のジャンプ（跳躍）を試みます。それが、かの有名な「イデア説（実相の説）」です。

感覚されるものの不完全性

プラトンは考えました。

「この目で見たり、手で触れたりする『感覚されるもの（aistheta）』は、ヘラクレイトスの言

う通り、常に変化し、衰え、消え去る不完全なものだ。この世界には、完璧な正義も、完璧な円も、完璧な美も存在しない。

それなのに、なぜ私たちの心には『完璧な円』や『完璧な正義』という概念があるのだろうか？」

プラトンが出した答えはこうです。

「それは、私たちがこの肉体を持って生まれる前に、かつて魂の状態で旅した場所で、完璧な真の実在（アイデア／エйдス）を直接見ていたからだ。この現実世界の物事はすべて、その完璧なアイデアの『不完全なコピー（影）』に過ぎない」

「切り離し（コーリスモス）」という事件

引用文の決定的な部分を読みましょう。

「ところが、あの人々（プラトン派）は、それらを切り離した。そしてそのように独立して存在するものをアイデアと呼んだ。」

ここに出てくる「切り離した（コーリスモス）」というギリシャ語は、プラトン哲学とアリストテレス哲学を分かつ運命のキーワードです。

プラトンは、私たちが目にする「感覚されるもの（個物）」と、頭で思考する「普遍的なものあるいは諸定義（アイデア）」を、完全に二つの世界に引き裂いてしまったのです。

- 感覚界（私たちが生きる、流転する不完全な世界）：ラーメン、枯れる花、老いる肉体。
- 叡智界（天上の、永遠不変で完璧な世界）：ラーメンのアイデア、美のアイデア、円のアイデア。

プラトンにとって、真に「存在する（ウーシア）」と言えるものは、天上に切り離されて存在するアイデアのみでした。私たちの目の前にある現実世界は、アイデアの影が揺らめいているだけの、いわば「映画館のスクリーン」のようなものだったのです。

第3章：アリストテレスの違和感——なぜ世界を二つに分けるのか？

さて、ここからが本題であり、問1の核心に迫る部分です。

プラトンの弟子でありながら、20年間にわたって彼の学園（アカデメイア）で学び、やがて独自の思想を打ち立てた天才、それがアリストテレスです。

アリストテレスは、師プラトンのアイデア説に対して、強烈な違和感を抱きました。それが、問題文にある次の言葉に繋がります。

「実相（エイダス）は存在するということが色々な仕方で証明されているが、そのいずれも真実らしくはない」

アリストテレスの批判の本質は、極めて常識的でありながら、同時に恐ろしく鋭いものでした。

「プラトン先生、あなたは『普遍的なもの（定義）』を説明するために、それを現実世界から切り離して（コーリスモス）、天上の別世界に置いてしまいました。しかし、そんなことをしたら、余計に説明が難しくなるだけではありませんか？」

アイデア説への鋭い突っ込み

アリストテレスはこう突っ込みます。

1. 無駄な二重化：現実世界のものを説明するために、天上にもう一つ「アイデアの世界」を作るのは、数えにくいからといって品物の数を2倍に増やすようなものだ。
2. コミットメントの欠如：天上にある「美のアイデア」が、どうやってこの地上の「美しい花」を美しくさせているのか？ プラトンは「分有（関与）」とか「模倣」という文学的な表現を使うが、その具体的なメカニズム（因果関係）が全く説明されていない。アイデアは動かないのだから、地上の変化（流転）の原因にはなり得ない。

アリストテレスは、「普遍的なものは、個物から切り離されて存在するのではない。個物の中にこそ存在するのだ」と考えたのです。

第4章：アリストテレスの「ウーシア（本質存在）」論

では、アリストテレス自身の考える「ウーシア（本質存在・基本存在・実体）」とはどのようなものなのでしょうか。

「ウーシア（ousia）」という言葉は、ギリシャ語の「存在する（eimi）」という動詞から派生した言葉で、文字通り「真に存在するもの」を意味します。

「これ（**tode ti**）」としての個物

プラトンにとって、真に存在するもの（ウーシア）は、地上の不完全な個物ではなく、天上の「普遍的なアイデア」でした。

しかし、アリストテレスはこれを真逆にひっくり返します。

アリストテレスにとって、最も根本的な意味で「ウーシア（第一実体）」と呼べるものは、天上のアイデアなどではなく、「目の前にある、まさにこれ（**tode ti**）」と指し示せる具体的な個物

です。

例えば、「このソクラテスという一人の人間」「私の目の前を歩いているこの猫」「この1本のペン」。これらこそが、最もリアルに「存在している」ものであり、すべての思考の出発点です。

脱線：私の愛猫「ペロ」と「猫のアイデア」

ここでまた少し脱線させてください。我が家には「ペロ」という三毛猫がいます。毎日、私の布団に入ってきてはゴロゴロと喉を鳴らす、実に愛らしい個物（ウーシア）です。

プラトン風に言えば、「ペロが可愛い猫であるのは、天上の『猫のアイデア』をペロが不完全に分有しているからだ」となります。しかし、私にとってリアルなのは、天上の「抽象的な猫のアイデア」ではありません。今まさに私の膝の上で温もりを放ち、時折爪を立ててくる「ペロという具体的な個物」です。

アリストテレスならこう言うでしょう。

「源二先生、その通りです。普遍的な『猫らしさ（エイダス）』は、天上の別世界に独立して浮遊しているわけではありません。それは、ペロという具体的な個物の中に、しっかりと宿っている（内在している）のです」

質料（ヒュレー）と形相（エイダス）のドッキング

アリストテレスは、目の前の具体的な個物（ウーシア）を分析するために、「質料（ヒュレー）」と「形相（エイダス／モルフェー）」という二つの概念を提唱しました。

- 質料（ヒュレー）：その物を作っている「素材」です。ペロで言えば、肉や骨や毛。
- 形相（エイダス）：その素材を「その物たらしめている設計図、本質」です。ペロで言えば、「猫としての構造、機能、生き方」。

アリストテレスにとって、プラトンの言う「エイダス（実相・アイデア）」とは、素材（質料）から切り離された抽象物ではなく、素材（質料）と結びついて、具体的な個物を形作っている「本質」なのです。

真鍮（質料）に、球体の形（形相）が組み合わさることで、初めて「真鍮の球」という一つの具体的な存在（ウーシア）が生まれます。球の形だけが、真鍮から離れて宇宙のどこかにポツンと浮いているわけではないのです。

さあ、講義も佳境に入ってきました。

ここで、試験の答案用紙に書くべき「解答の骨子」を、プロフェッショナルかつ論理的に整理していきましょう。博士課程の院生諸君も、ここからはペンを走らせるように。

今回の問題は、「感覚されるもの」と「普遍的なものあるいは諸定義」の対比に着目して、プラトンとアリストテレスの考え方の違いを説明することを求めています。

この二人の対立図式は、以下のように美しく整理されます。

1. プラトンのイデア説における対比

- 感覚されるもの：

ヘラクレイトスの言う通り、常に生成変化し、消滅する不完全なものである。したがって、これらに対する「確実な学問的認識（知識）」は成立しない。

- 普遍的なものあるいは諸定義（イデア）：

「感覚されるもの」とは完全に「切り離されて（独立して）」別世界（叡智界）に存在する、永遠不変の真の実在（ウーシア）である。

- 関係性：

感覚される個別的なものは、天上にある本物の「普遍的なイデア」を模倣した不完全なコピー（影）に過ぎない。

2. アリストテレスの「ウーシア」論における対比

- 感覚されるもの（個物）：

これこそが最も根本的な実在、すなわち「第一実体（ウーシア）」である。流転する現実の個物こそが、存在の基盤である。

- 普遍的なものあるいは諸定義（形相／エイドス）：

個物から切り離されて単独で存在するものではない。それは、感覚される個物のなかに「形相（本質）」として内在しているものである。

- 関係性：

普遍的なものは、個物の「質料（素材）」と結合し、それを「その物たらしめている本質」として個物の中に存在する。個物を離れて普遍が単独で存在する（コーリスモスする）ことはない。

決定的な違いのまとめ

一言で言えば、「普遍的なものを、個物の『外（天上）』に求めたのがプラトン」であり、「普遍的なものを、個物の『内（現実）』に求めたのがアリストテレス」です。

プラトンにとっては、普遍こそが真のウーシアであり、個物は偽りの影でした。

アリストテレスにとっては、個物こそが真のウーシアであり、普遍はその個物のあり方を決定づける本質（第二実体）に過ぎなかったのです。

おわりに：私たちはどこに立っているのか

市民の皆さん、そして院生諸君、いかがでしたでしょうか。

私たちは日々、流れる時間の中で生きています。私たちの身体は衰え、街の景色は変わり、ラーメンのスープの味も変わっていきます。すべては「感覚される流転のもの」です。

しかし同時に、私たちはその変化の中に、決して変わらない「愛」や「正義」や「真理」、あるいは「猫らしさ」といった「普遍的なもの」を確かに感じ取っています。

プラトンのように、この不完全な世界を見捨てて、天上の美しい完璧な世界（イデア）に憧れを抱くのか。

それともアリストテレスのように、この泥臭く流転する現実世界を愛し、その個物の中に宿る本質（ウーシア）を一つひとつ丁寧に解き明かしていくのか。

この二人の対立は、単なる2400年前の居酒屋の議論（当時はプラトンのシンポジオン、つまり飲み会ですね）ではありません。今私たちが、この世界をどう捉え、どう生きていくかという、まさに「生き方の選択」そのものなのです。

今日の講義が、皆さんの退屈な日常の景色を少しだけ変える、知的なスパイスになれば幸いです。

それでは、本日の講義はここまで。博士課程の諸君は、この後研究室でさらに細かいギリシャ語のテキストの検討会を行いますので、逃げずに集まるように。市民の皆さんは、どうぞお気をつけてお帰りください。ありがとうございました。